

下総考古学



〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）

研究史

- 西村正衛による「阿玉台式土器編年的研究」完成の前段階
——「利根川下流域における縄文中期文化の研究（予報）」『古代』34号（1960年）—— 大村 裕
- 西村正衛の阿玉台式土器研究の軌跡
——「阿玉台式土器編年的研究の概要」（文学研究科紀要第十八号）を中心に—— 小林謙一
- 佐藤達夫「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」における阿玉台式土器について 大村 裕
——山内清男の土器型式概念との比較も兼ねて——
- 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団『縄文中期土器群の再編』」における阿玉台式土器の記載の検討
小澤政彦

関東地方における阿玉台式土器集成結果（その2）

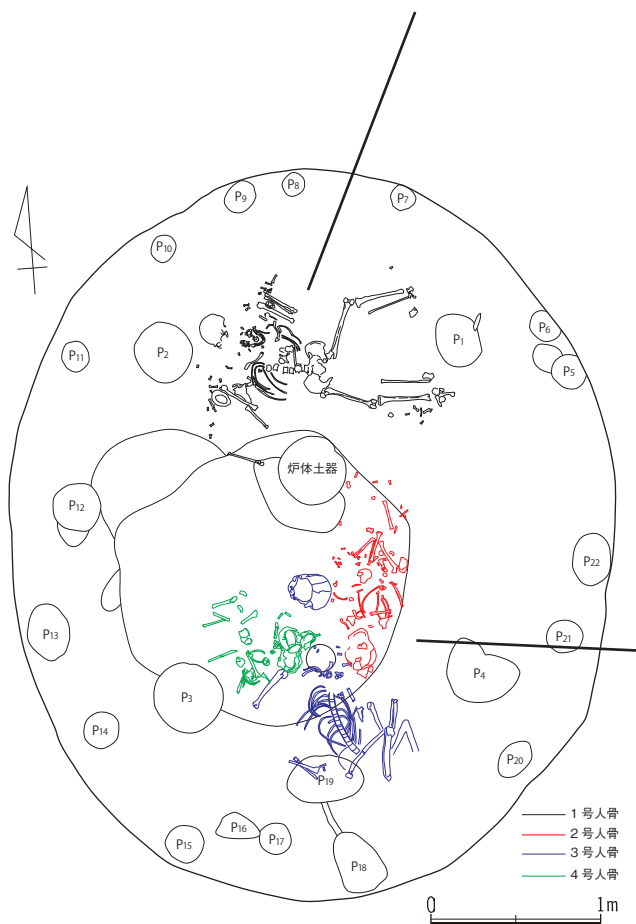
- 東京都域における阿玉台式（後半）の土器（補遺） 合田恵美子
——杉並区中袋遺跡第2号住居跡出土土器の検討——

千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査の成果

- 千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査報告 下総考古学研究会
- 付編
- 1 中峠遺跡第8次調査出土の動物遺体（含：人骨破片） 植月 学
- 2 中峠遺跡第8次調査第2号住居址炉体土器およびこれと同一個体の可能性ある土器片の胎土分析
建石 徹・奥山誠義・小倉頌子・河崎衣美
- 3 中峠遺跡第8次調査出土人骨にみられた齧痕と埋葬環境復元における意味 植月 学
- 4 中峠遺跡第8次調査第1号住居址内における人骨の出土状況について 山田康弘
- 5 中峠遺跡第8次調査出土土器の文様割付 小林謙一

- 房総地域の縄文時代中期の大形石鏃 ——東長山野型石鏃の展開とその意義—— 大工原 豊

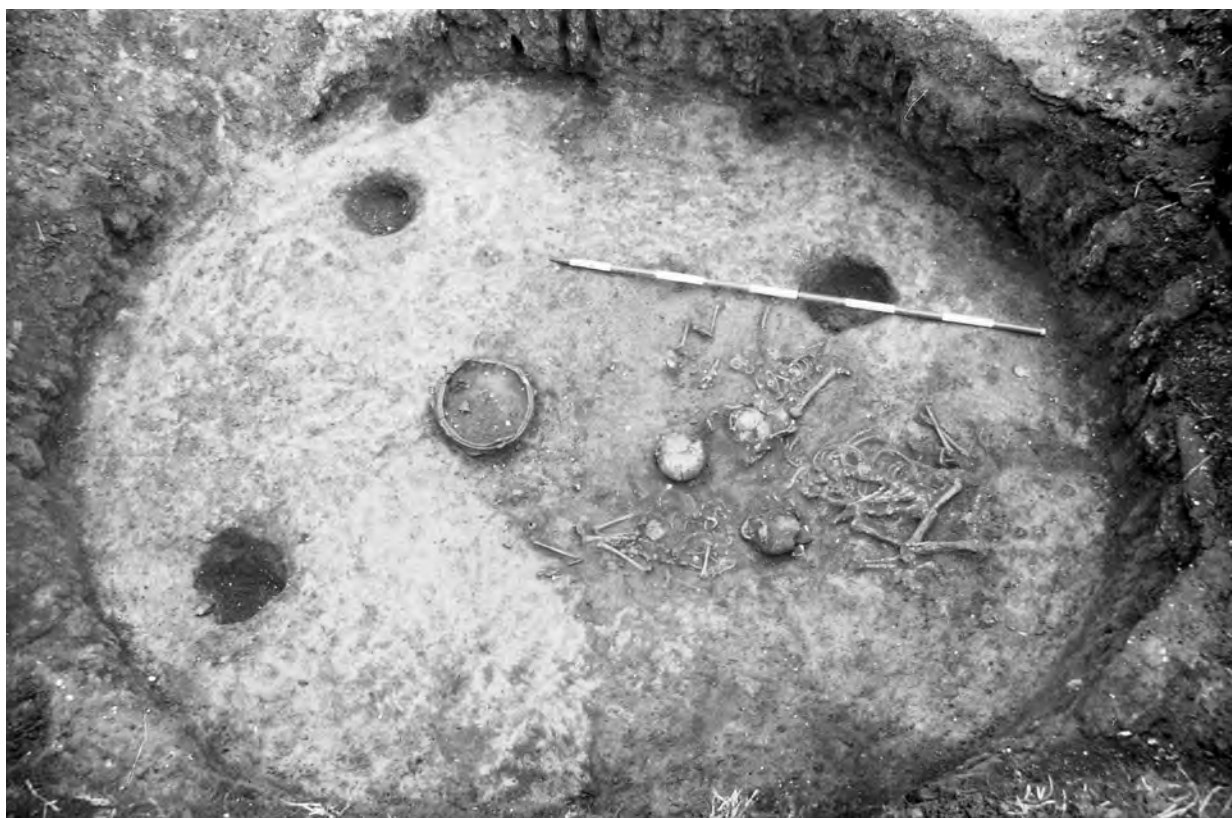
下総考古学研究会の記録



1号住居址 人骨群の出土状況



1. 1号住居址1号人骨の実測風景



2. 1号住居址2～4号人骨の出土状況(拡大写真。1号人骨は既に取り上げてある)



1号住居址 炉体土器 (第20図)



1号住居址 炉体土器を覆うロームブロック混入茶褐色混貝土層



1号住居址 土器 (第21図1) 出土状況



1号住居址 土器 (第21図3) 出土状況



1号住居址 土器 (第22図5) 出土状況



1号住居址 土器 (第25図54) 出土状況



1号住居址 土器 (第34図296) 出土状況



2号住居址 炉体土器 (第41図)



(実測正面)

1号住居址炉体土器 (第20図)



第22図5



第22図6a



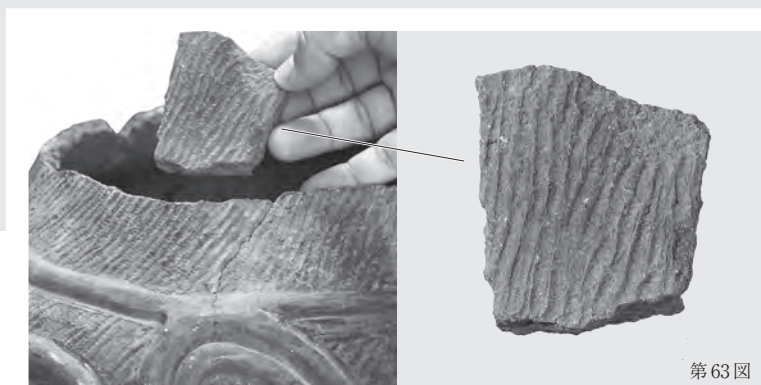
第22図6b



(実測正面)

第23図7

1号住居址出土完形・半完形土器



第63図

2号住居址炉体土器と同一個体の可能性を考えた1号住居址出土土器片

下総考古学 25

目次

〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）

研究史

- 西村正衛による「阿玉台式土器編年的研究」完成の前段階 ————— 大村 裕 1
——「利根川下流域における縄文中期文化の研究（予報）」『古代』34号（1960年）——
- 西村正衛の阿玉台式土器研究の軌跡 ————— 小林謙一 11
——「阿玉台式土器編年的研究の概要」（文学研究科紀要第十八号）を中心に——
- 佐藤達夫「土器型式の実態 —五領ヶ台式と勝坂式の間—」における阿玉台式土器について ————— 大村 裕 24
——山内清男の土器型式概念との比較も兼ねて——
- 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団『縄文中期土器群の再編』」における阿玉台式土器の記載の検討 ————— 小澤政彦 38

関東地方における阿玉台式土器集成結果（その2）

- 東京都域における阿玉台式（後半）の土器（補遺） ————— 合田恵美子 56
——杉並区中袋遺跡第2号住居跡出土土器の検討——

千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査の成果

- 千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査報告 ————— 下総考古学研究会 66

例言

- I 調査の目的（大村 裕）
- II 調査の経過（合田恵美子・三門 準・大村 裕）
- III 第7次調査地点B・C・Dトレンチの調査
 1. 調査の概要（大村 裕）
 2. B・C・Dトレンチの層位（大村 裕）
 3. 出土遺物
 - 3-1. 土器 A. 凶上復元土器（大村 裕） B. 土器片（大村 裕ほか）
 - 3-2. 石器（大工原 豊）
- IV 第8次調査で検出された遺構と出土遺物
 - はじめに（大村 裕）
 1. 第1号住居址
 - （1）規模と形態（小澤政彦・小林謙一） （2）覆土の層位（大村 裕）
 - （3）人骨の出土状況（合田恵美子・小澤政彦）
 - （4）出土遺物
 - ①土器
 - A. 完形および半完形土器の出土状況（大村 裕）
 - B. 完形・半完形土器の記載（小澤政彦・建石 徹・合田恵美子・大村 裕）
 - C. 土器片（大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・菅頭明日香・合田恵美子・小林謙一・建石 徹・千葉 毅）

②土製品 (大熊佐智子)

③石器 A. 出土状況 (大工原 豊) B. 石器の記載 (大工原 豊) C. 礫 (大工原 豊)

④貝製品 (千葉 毅)

2. 第2号住居址

(1) 規模と形態 (小澤政彦・小林謙一)

(2) 覆土の層位 (大村 裕)

(3) 出土遺物

①土器

A. 半完形土器および図上復元土器の出土状況 (大村 裕)

B. 半完形土器・図上復元土器の記載 (小澤政彦・建石 徹・合田恵美子・大村 裕)

C. 土器片 (大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・菅頭明日香・合田恵美子・建石 徹・三門 準)

②土製品 (大熊佐智子)

③石器 A. 出土状況 (大工原 豊) B. 石器の記載 (大工原 豊) C. 礫 (大工原 豊)

④骨角貝製品 (千葉 毅)

3. 出土地点不明の遺物について (大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・金子悠人・建石 徹・千葉 毅)

V 考察

1. 中峠遺跡第8次調査地点検出の1号住居址と2号住居址の新旧関係について

(大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・菅頭明日香・合田恵美子・小林謙一・建石 徹・千葉 毅)

2. 出土人骨からみた1号住居址の埋没過程 (合田恵美子)

3. 中峠遺跡検出住居址のライフサイクル的な整理 (「廃屋墓」としての使用を中心に) (大内千年・千葉 毅)

4. 中峠遺跡第8次調査出土の石器について (大工原 豊)

VI まとめ (大内千年)

付編

1 中峠遺跡第8次調査出土の動物遺体(含:人骨破片) —————	植月 学	186
2 中峠遺跡第8次調査第2号住居址炉体土器およびこれと同一個体の可能性ある土器片の胎土分析 —————	建石 徹・奥山誠義・小倉頌子・河崎衣美	201
3 中峠遺跡第8次調査出土人骨にみられた齧痕と埋葬環境復元における意味 —————	植月 学	203
4 中峠遺跡第8次調査第1号住居址内における人骨の出土状況について —————	山田康弘	212
5 中峠遺跡第8次調査出土土器の文様割付 —————	小林謙一	217

房総地域の縄文時代中期の大形石鏃 ——— 東長山野型石鏃の展開とその意義 ———	大工原 豊	221
------------------------------------------	-------	-----

下総考古学研究会の記録 —————		245
-------------------	--	-----

あとがき —————	大村 裕	
------------	------	--

西村正衛による「阿玉台式土器編年的研究」完成の前段階

——「利根川下流域における縄文中期文化の研究(予報)」『古代』34号(1960年)——

大村 裕

I

西村正衛は、1949～1950年頃から本格的な利根川下流域における縄文文化研究に関わることになる。それは山内清男の勧めがあったからであるという(西村、1988:48頁)。この地域研究を志した問題意識として、西村はかなり抽象的で晦渋な説明を本論文(西村、1960)において展開している。具体例が提示されていないので西村の真意をつかみきたいが、筆者なりに要約すると、

同等の環境下にある遺跡を組織的に調査し、同時期における周辺地域の遺跡・遺物と比較して当該地域の遺跡・遺物の独自性を抽出。その独自性を生み出した背景を追究するとともに、地域文化の類型(「価値体系と一致した行動の類型」)を抽出する。

ということになるだろうか。当時の縄文文化研究は、草創期から早期の土器群や、晩期の土器群の編年研究などに注意が向けられ、目的意識を持った組織的な地域研究はほとんど行なわれていなかった。こうした学界の趨勢の中で、膨大な海外の文化人類学関係文献を渉猟し、先史時代社会における地域研究の理論を構築して進められた西村の地域研究は、今日においても匹敵するものはなく、高く称賛されるべき業績といえよう。ちなみに当時、縄文中期中葉の阿玉台式土器は、霞ヶ浦沿岸地域および利根川下流域に集中していると考えられていたので、当該土器型式研究は、上記に示した西村の問題意識に合致するものであったのである。阿玉台式土器の定義を確立し、その細分を実現することは、同じ時期における周辺地域の遺跡・遺物と比較して当該地域の遺跡・遺物の独自性を抽出するために、必須の基礎的研究であったといえよう。

西村による阿玉台式土器の編年的研究は、今日においてもなお重要な業績として多くの研究者に参照されているが、もちろん最初から完成された形で提示されたものではない。長い期間にわたる継続的調査と思索の過程で生まれたものである。しかし遺憾ながら、西村は新しい所見を提示する場合、過去における自らの研究とのすり合わせを丁

寧に行なっていないため、少なからぬ混乱を招いている(大村、1987)。ここでは、西村による阿玉台式研究の「中間報告」が含まれている標記文献(西村、1960)を俎上に載せ、1960年段階で西村が阿玉台式土器の編年をどのように考えていたのかを検討してみたい。なお当該論文では、阿玉台式土器の他に五領ヶ台式土器や加曾利E式土器および大木8式土器の地域性、さらには前期の「植房式土器」・浮島式土器についても言及しているが、本特集の趣旨から外れることになるし、紙幅の制約もあるので割愛することとする。

II

西村(1960)が公表されるまでに、西村正衛によって調査された当該土器関係遺跡は以下の通りである。

- ① 1950年 千葉県香取郡小見川町(現香取市) 通路貝塚 雷貝塚
- ② 1951年 同上 向油田貝塚
- ③ 1952年 同上 雷貝塚
- ④ 1953年 同上 雷貝塚
- ⑤ 1957年 同上 阿玉台貝塚
- ⑥ 1958年 同上 木之内明神貝塚 内野貝塚

これらの調査のデータに基づき、1960年論文が執筆されたものと推定される。西村(1960)では、阿玉台式土器の変遷について、以下のような分類を行なっている。

- イ) 発生的様相
- ロ) 古式的様相
- ハ) 発展的型態
- ニ) 末期的様相
- ホ) 最末期の状態

これらの分類に関する説明を表にまとめると、次頁第1表左欄のようになる。この分類が、西村による阿玉台式編年の基本文献(「阿玉台式土器編年的研究の概要」)(西村、1972a)の細別、すなわち

- a 阿玉台式土器直前(阿玉台直前型式群)
- b 阿玉台式第I類a種(阿玉台Ia式)、

西村正衛の阿玉台式土器研究の軌跡

—— 「阿玉台式土器編年の研究の概要」(文学研究科紀要第十八号)を中心に ——

小林 謙一

はじめに

西村正衛(1915年生)による利根川下流域の早期から晩期に至る貝塚群の研究は、1980年代までの縄紋文化研究の到達点の一つである。その中でも、貝塚の層位学的見解と型式学的操作を組み合わせた阿玉台式土器の編年研究は、山内清男縄紋土器編年研究の継承をしつつも、さらに土器地域文化再構築の研究へと止揚した金字塔であり、今日的にも阿玉台式土器編年研究の先頭に位置するものと評価される(小林1984など)。編年研究の基準資料、貝層の堆積をはじめとした示準となる遺跡の内容まで各報告が提示されており、編年に関する研究論文も本稿で取り上げる「阿玉台式土器編年の研究の概要」論文などが残されている。編年研究に果たした大きな足跡をたどる学史的検討も、本誌掲載の大村論文に現れている様に、これまでも検討が重ねられている。

ここでは、西村正衛1972「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心に—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18号における、阿玉台式土器編年の記述を検討し、利根川流域貝塚群出土の土器がどのように分析されているかを見ていくことで、利根川下流域中期文化研究としての西村縄紋学の構造を分析していきたい。また、その研究背景を探るために、九学会による利根川調査との関係、貝塚群の調査における山内清男との関係に焦点を当てて検討を加えてみたい。

1. 研究経緯の学史的検討

1) 経歴

最初に西村正衛の経歴と研究業績を整理しておきたい。典拠とするのは、早稲田大学の「本年度(1984年度)定年退職者」として、『早稲田大学教育学部学術研究—国語・国文学編—』第34号(1985年)にその経歴を掲載した

「西村正衛教授略歴・業績」である。第1表に年代順に掲示する。

この年表は、おそらくは本人が退職時に提出したりストと考えられ、そうであるならばその内容は本人が自らの経歴、研究の中で重要と認めている事項を並べていると捉えられる。西村は、学内外での委員歴や、滝口宏らと1958年に参加し1960年に『八重山』として報告書がだされる早稲田大学初の国際学術調査と評価される八重山諸島の総合調査の関係、1968年に科学研究費助成を受けることなど、「大学人」としてのアピールポイントはほとんど記さず、学術研究そのものについて列記している。

その中で、西村自身によると思われる第1表の研究業績の中には簡単に「1966~1968年九学会利根川総合調査」と記されるのみなのであるが、利根川下流域の貝塚群調査の間に九学会での調査に参加している点を記していること

第1表 西村正衛 早稲田大学定年退職時に提示した経歴(早稲田大学)年表・調査・論文(以下では、白井雷は雷と略)

1915 (大正4年) 生まれ(註1995死去.)	1943 木之内明神発掘(戦災で資料焼失)
1945 大学院卒・高等師範講師	1949 西村・金子「雷2・3次」学術研究3
1950 教育学部講師	1950 白井通路貝塚発掘・雷第一次発掘
	1951 向油田発掘・「雷概報」古代3
	1952 「向油田概報」古代7・8
1953 同助教授	1954 「雷」学術研究3(奥付は1955/1)
	1957 阿玉台発掘
	1958 木之内明神発掘・内野貝塚発掘
	1960 三郎作発掘・「予報」古代34
	(1960~68は主に早期・前期の貝塚を調査)
1961 同教授	(1966~68九学会利根川総合調査)
	1968 村田貝塚発掘
	1969 「木之内明神」学術研究18
	1970 「阿玉台」学術研究19
1971 大学院考古学担当	1971 「三郎作」学術研究20
	1972 「向油田」学術研究21
	1972 「阿玉台式土器編年の研究」紀要18
	1981 「村田」学術研究30
	1984 『利根川下流域の研究』

佐藤達夫「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」における阿玉台式土器について

—— 山内清男の土器型式概念との比較も兼ねて ——

大村 裕

はじめに

1977年、本会による勝坂式土器の共同研究(下総考古学研究会、1985)の一環として、標記の論文が塚田光会員をチーフとする「型式班」によって検討され、その成果が『研究メモ』139号(1977年)に提示された。その内容は極めて手厳しいものであり、〈佐藤達夫氏の方法論は山内清男氏の方法論とは似て非なるものであり、本会が関わる必要のない論文である〉とされた。

しかし筆者が標記論文を再検討した結果、佐藤(1974)は塚田会員らが評価したような、参照不要な研究では決してなく、成城大学大学院学生諸氏(戸田哲也、土肥孝ら)の協力を得て⁽¹⁾、当時周知されていた五領ヶ台式終末から「井戸尻Ⅰ式」の間の資料を悉皆調査し、それらの検討を踏まえた上での重厚な論文であることが改めて確認出来た。一遺跡から出土した多数の土器片の中から、当該資料の1~2点を漸く探し出しているケースも多数確認できた。それは、本会が「中峠式土器」の再検討をしたときの手法(共同研究の手法)であり、複数の「小型式」(筆者からみたら類型)がやがて「勝坂式土器」という「大型式」に収斂して行く状態を叙述している点でも、われわれの「中峠式土器」の共同研究(下総考古学研究会、1998)と共通するものがある。佐藤の当該論文は、資料の提示・引用が紙幅の制限にあってか十分ではなく、その結果「難解」という印象を与えているが、指示された資料を原典にあたれば、かなり理解が容易である。こうした試みが今までなかったため、表層的な理解に終わってしまっているケースが多いように思われる。筆者は、佐藤論文(1974)の再検討に当たって、佐藤が論述の中で指示した原典を悉皆的に調査し、その当否を検討した成果を本会の2018年8月例会で発表したが、今回は紙幅の関係で、なるべく阿玉台式土器に関係する部分のみに焦点を当てて検討を行なってみる。ただし、山内清男の型式学と佐藤の型式学の異同については若干言及しておく。佐藤は一般に、山内考古学の正統の後継者として認識されているが、両者には極めて大きな相違が

あり、学史研究上重要なことなので、この機会にこのことについて特に言及してみたい。佐藤達夫の視座から見た「山内考古学の風景」と、筆者に見える「山内考古学の風景」(大村、2008; 2011; 2014)の違いの原因を明らかにしたいからである。

1. 佐藤達夫の問題意識

佐藤は、土器型式の一般的理解として以下のような解説をしている。

「土器の型式は時期的・地域的に、分離しうる最小の単位と考えられている。通常ある範囲に、同一の系統に属する一群の土器があり、それらが紋様の特徴から単一の時期に属すると考えられる場合、一型式と認定される。」(81頁 傍点は引用者)

この認識は山内清男の定義(山内、1939→1967; 1964: 148頁)をほぼ踏襲するものであるが、次のような問題提起を加えている。

「しかし実際は、異なる時期のものや、あるいは異系統のものが混在し、型式の識別に困難を生じる場合の方が多い。」(81頁)

「ある場合には一時期に属する一遺跡において、幾つかの異系統の土器が共存し、またある場合には一個の土器に系統を異にする紋様が組合わされている。このような複雑な事態は何によって起こるのであろうか。これらの土器は各系統間のどのような関係において作られているのか。そして土器の型式をどのように扱うべきなのか。」(82頁)

すなわち、縄紋遺跡において頻繁に認められる異系統土器の共存問題をどのように理解すればよいのかを考えてみたい、とするのである。ここで佐藤は、山内清男による異系統土器共存問題および型式変化の背景に関する解釈を紹介する。すなわち「関東・中部・畿内諸地方の土器型式に伴存する大洞式土器を移入品と認定され、また関東の晩期終末、千網式以降の型式変化を、部族間の闘争による勢力の交替に基づくものと考えられた」とするのである(81~82

「埼玉県埋蔵文化財調査事業団『縄文中期土器群の再編』」における 阿玉台式土器の記載の検討

小澤政彦

はじめに

縄文時代中期の土器編年研究の中で、「縄文中期土器群の再編」(谷井ほか1982)は、多くの研究者や報告書執筆者に参考にされてきた。この中で示されたいわゆる「埼玉編年」(事業団編年とも呼ばれる)は、埼玉県内をフィールドに研究を行っていた谷井彪、宮崎朝雄、大塚孝司、鈴木秀雄、青木美代子、金子直行、細田勝の7名で共同執筆され、縄文時代中期土器群を分類し、時間軸としてI期からXIV期まで設定されたものである。

現在、下総考古学研究会では、阿玉台式後半の土器について共同研究を行っている。また筆者も前号において、埼玉県内の阿玉台式後半の土器について扱った(小澤2017)。これらを踏まえ、ここでは多くの研究者に参考にされてきた「縄文中期土器群の再編」における阿玉台式土器がどのように扱われているかを検討する。

1. 「縄文中期土器群の再編」の構成

「縄文中期土器群の再編」の検討に当たり、この論考の構成について以下に示す。括弧内はその章の執筆者である。

- 第1章 縄文中期土器群の再編にあたって(谷井彪)
- 第2章 中期社会と特質(谷井彪)
- 第3章 中期土器群編年研究史(宮崎朝雄)
- 第4章 土器の変化について(谷井彪)
- 第5章 縄文中期土器群の変遷(I～III期:鈴木秀雄、IV～VI期:谷井彪、VII・VIII期:細田勝)
- 第6章 今後の課題(宮崎朝雄)

第1章では埼玉県の調査事例と中期の研究について端的にまとめている。また「縄文中期土器群の再編」執筆当時の中期土器研究の進展⁽¹⁾について触れ、執筆者たちも勉強会を行い、その成果として「南関東を中心とした編年案」(p.3)を作成するに至った経緯が述べられている。南関東の編年を意図しているため、対象地域は、「埼玉とその周辺ということで、東京、千葉を中心に神奈川の一部も加え」(p.3)、また読者の理解を助けるために「周辺地域の土器

も随時援用」(p.3)したと述べている。つまり「埼玉編年」と呼称されているが、埼玉地域の地域性を示すための編年ではなく、南関東の土器編年を意図している点を確認しておきたい。

第2章では時期区分や中期の社会様相、遺跡のあり方や消長、遺構・遺物の特色について概観されている。「(5) 関東及び周辺地域における土器群の様相と展開」では関東地方における前期末から後期初頭に至るまでの土器型式のあり方について概観している。その中で阿玉台式土器について述べている部分を中心にここでは検討する。阿玉台式土器成立について、西村正衛の五領ヶ台式終末からの阿玉台式成立までの変遷案(西村1972)を認めつつも、猪沢式のある段階から阿玉台Ib式が並行するとの認識から、東西における土器群の成立における課題を指摘した。また「埼玉編年」では「中部、関東西部の土器で再編し東部関東の土器の再検討を進める」(p.9)とし、阿玉台式土器は「五領ヶ台式終末あるいは猪沢式古期に成立」(p.9)すると捉えている。また阿玉台II式後半には勝坂式の影響を受けた土器が出現するとし、この土器を「西村氏のいう阿玉台III式にあたるが、共存している例も多い。勝坂式と伴出している例はこの阿玉台III式タイプの土器が普通である。」(p.10)と述べている。型式学的に分類された阿玉台III式が、出土状況としては阿玉台II式後半に伴うと指摘している。阿玉台III式は「埼玉編年」VII期に位置づけているが、このVII期の土器群の中に阿玉台II式と考えられる土器も含まれるのは、こうした出土状況に基づく考えがあるからと推測される。また阿玉台IV式については、「隆帯等に縄文を施す阿玉台IV式」(p.10)と説明しており、西村が重視した隆線脇に沈線が引かれる特徴については説明がなされていない。西村編年で重視された特徴とは違う視点で阿玉台IV式を捉えているものと考えられる。

第3章では関東地方における中期の土器型式の編年研究史が概括的にまとめられている。

第4章では土器の変化について、型式、様式といった考古学における分類について述べている。この研究者間にお

[関東地方における阿玉台式土器集成結果 (その2)]

東京都域における阿玉台式 (後半) の土器 (補遺)

—— 杉並区中袋遺跡第2号住居跡出土土器の検討 ——

合田 恵美子

はじめに

『下総考古学』24号において「東京都域における阿玉台式 (後半) の土器」(合田2017: 以下「旧稿」)として阿玉台Ⅲ式・阿玉台Ⅳ式(西村正衛1972の5細別編年に基づく、以下「西村編年」)の集成と層位事例の検討を行なった。本論ではその補遺として、阿玉台Ⅳ式と勝坂式が伴って出土した杉並区中袋遺跡2号住居跡(杉並区教育委員会他2018)を題材として、両型式の出土状況を詳細に検討し、武蔵野台地における阿玉台式後半に関する議論の重要課題である「阿玉台Ⅳ式の終焉はいつか」という問題について、考察を深める一助としたい。

1. 中袋遺跡2号住居跡の概要

中袋遺跡は杉並区高井戸一丁目に所在し、井の頭池を源流とする神田川右岸の河岸段丘上に位置する。昭和10年代に土器片や石斧の散布地であることが報告され、その後の発掘調査等により、中期前葉から後葉の集落跡であることが判明している。また、本遺跡から約3km下流の神田川右岸には、中期前葉から後葉の集落が確認された下高井戸塚山遺跡が所在する。

本論で取り上げる中袋遺跡第2次調査(杉並区教育委員会他2018)では、調査区176.2㎡の中で中期中葉の住居跡が3軒検出されている。1号住居跡・2号住居跡は下総考古研究会による「勝坂式土器の研究」で提示された編年(下総考古学研究会1985、以下「下総編年」)の勝坂Ⅲ式～Ⅳ式を炉体土器として使用し、覆土中からは主に勝坂Ⅲ式からⅤ式が出土している⁽¹⁾。

2号住居跡は長径4.56mの不整円形を呈する住居址で、西側約1/4が調査区外となる。確認面からの深さは最大54.6cmである。覆土は1～7層に分層され、2層に特に多く遺物を含んでいる(第1図)。本論で取り上げる阿玉台Ⅳ式は2層中から出土している。

住居覆土各層の土層注記に記載された色調や締り、内容物から見て、本論では1～7層を「上層(1層)、中層(2層)、

下層(3・4層)、壁際堆積土(5層)、床面上堆積土(6層)、掘方(7層)」と考えた。掲載遺物、非掲載遺物それぞれについてはいわゆる「新地平編年」(小林・黒尾・中山2004、中山2016)による分類がなされ、住居跡平面・断面の遺物出土状況図(第2図)や土器分布図(ドット図・第3図)が掲載されている。

実測図が掲載された土器は中期中葉から後葉にかけての61個体で、このうち48個体が勝坂式または阿玉台式と同定されている。合わせて、「完形ないし半完形土器の時期幅は(新地平編年)7b～9c期で8b～9a期のものが多い。炉体土器は8b期である」と報告されている。なお、個々の出土遺物に対する出土層位の記載はないため、以下に記す出土層位は、第2図・第3図の分析をもとに筆者が同定した層位である。

2. 2号住居跡出土土器の検討

(1) 阿玉台式土器の型式同定と出土層位

今回の議論の中心となる阿玉台式の深鉢形土器(第4図5・6、以下、個々の遺物番号は報告書における遺物番号と同じ)のうち、5は2層(覆土中層)から、6は接合破片のうち1点が1層(覆土上層)に含まれるものの、2層を中心として出土している(第3図下段)。

第4図5は口縁部に扁平な山形の把手が3単位配され、把手の頂部下にV字状に隆線を貼付する。口縁部内面には稜が作り出され、地文はない。報告書ではこの土器を阿玉台Ⅲ式としているが、「西村編年」における阿玉台Ⅲ式の指標は隆起線に伴って爪形文や幅広の角押文を付随させることであり(西村1972)、この土器には当たらない。一方、阿玉台Ⅳ式の指標である隆線脇に付随された沈線も5には見当たらないが、扁平な山形の把手が、「西村編年」で阿玉台Ⅳ式の指標とされた「山形板状の把手」にあたりと判断し、阿玉台Ⅳ式と同定した。

第4図6は同一個体の口縁部破片と胴部破片で、5と同じく山形の把手が配される可能性が高い。単節縄文RLを口縁部から胴部に縦方向に施文し、口縁部には隆線による

千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査報告

例 言

- (1) この調査報告は、1973年1月2日～6日、14～15日、21日、28日に行なわれた千葉県松戸市中峠^{なかびょう}遺跡第8次調査の本報告である。
- (2) 第1次～第8次調査及び第10次調査の概報はすでに本誌6号及び10号に公表してある。遺跡の地理的環境や周辺遺跡の分布の記述はそれらを参照されたい。第1次～第7次調査本報告は本誌12・13・14・16・19・23・24号に公表してある。
- (3) 調査報告の作成分担は、調査日誌の整理を大村 裕・合田恵美子が担当し、調査に実際に参加した三門 準が点検した。遺構図面類等の製図は小澤政彦・合田恵美子・大村 裕、土器類の拓本・実測図作成は大村 裕、出土土器片の型式認定・数量調査を大村 裕・大内千年・大熊佐智子・菅頭明日香・合田恵美子・千葉 毅・建石 徹・植月 学・小林謙一・小澤政彦・金子悠人・三門 準が担当し、全体を大村が統括した。なお、石器・石材類の整理・研究は大工原豊氏に依頼した。大工原氏には、各遺構出土の石器類の記載をして頂いたほか、今次調査の石器の意義について所見を頂いた。その内容は「V 考察 4」に記載してある。
- (4) 出土遺物の写真撮影は千葉 毅が行ない、金子悠人・小澤政彦が補佐した。
- (5) 1号住居址・2号住居址出土土器片は、原則として例会の席上において実物の点検・型式認定、および接合の有無の確認をし、数量データを取ったが、時間の関係で1号住居址出土土器片の一部の型式認定および数量カウントは大村が行なった。なおそれらについても、図化した土器片の型式認定は例会の席上で逐一確認をとった。
- (6) 1969年末～1970年初頭に実施した第7次調査地点B～Dトレンチにおいて隣接する2軒の住居址（「4号住」・「5号住」）のうち、「4号住」から人骨が出土したことにより、新潟大学医学部解剖学教室の小片保会員の応援を頼む必要が生じた。そこで、この地点の調査は今次調査にまわすこととし、埋め戻すことになった。今次調査は第7次調査の延長というべきものである。なお、第7次調査「4号住」は、今次調査では1号住、第7次調査「5号住」は今次調査では2号住として記録されている。本報告書における住居址呼称はこの記録にならっている。
- (7) 1号住居址出土人骨の調査は、その開始直後から新潟大学医学部解剖学教室員（当時）の森沢佐歳・加藤克知・古谷元康・郭美華の諸氏にお願いした。
- (8) 出土した人骨の整理・分析・記載は、聖マリアンナ医科大学教授（当時）の故森本岩太郎氏および吉田俊爾講師（当時）が行ない、『下総考古学』14号（1995年）に詳細な研究報告が行なわれている。解剖学的所見については当該報告を参照されたい。
- (9) 人骨の出土状態の検討や人骨調査の留意点については、国立歴史民俗博物館教授（当時）の山田康弘氏にご指導頂いた。山田氏には、2018年6月に本会が実施した新潟大学小片コレクション（中峠遺跡8次調査人骨）の実査にも同道頂いて種々ご指導を頂いた他、今次調査出土人骨の埋葬状態についてもコメントを頂戴した（付編4参照）。なお、この実査の折、新潟大学名誉教授の熊木克治氏には種々お世話になった。
- (10) 小片コレクションの実査において4号人骨を除き、齧痕が顕著に認められた。これの研究については植月学が別途行ない、付編3にその成果がまとめられている。

- (11) 中峠遺跡第8次調査出土人骨のうち、新潟大学に保管されている4体の人骨について、炭素14年代測定ならびに食性分析をするべく、新潟大学関係者にその可否を打診したが今回は実現出来なかった。
- (12) 今次調査においては、中近世・近代にかかわる遺物が少数ながら出土している。それらのうち、口辺部破片や底部破片などで実測可能なものを提示したが、昨今における当該期遺物の製図作法に従い、器内面の拓本を断面の左側に、器外面の拓本を断面の右側に配置してある。
- (13) 報文の内容は各担当者の草稿を研究会で検討した上で書き直したものである。その文責は文末に記した。内容に大きな齟齬がないよう、十分に注意したが、学術用語の選択・記述内容は、共同研究に直接関わらないものに関しては執筆者および筆頭執筆者の主体性を尊重して統一をしていない。
- (14) 動物遺体の研究は植月学が行なった。その成果は多岐にわたるため、「付編1」に掲載した。
- (15) 本報告書の電子データ上の編集は千葉毅が主に行ない、合田恵美子・小澤政彦・金子悠人が補佐した。
- (16) 発掘参加者は以下の通りである（所属はいずれも当時）。

猪越公子 岩崎道雄 五十嵐利勝 江森正義 遠藤龍畝 岡野政子 熊谷肇 斎藤弘道
芝崎孝 高橋良治 塚田光 戸田哲也 平野恭子 松村侑 宮下和子 湯浅喜代治 横山悦枝
(以上研究会)

森沢佐歳 加藤克知 古谷元康 郭美華（新潟大学）

金子進 谷口良子（常総台地研究会） 鈴木正吾（下総史料館友の会）

杉浦益治 石井良一 石原

三門準・小川多加夫・木川邦夫・篠原克行（成田高校社会科研究部） 高橋・三木（千葉工大）

篠原正（成田史談会）

- (17) 本報告書を作成するにあたり、下記の研究者・研究機関にご教示・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である（五十音順・敬称略）。

猪越公子 奥山誠義 小倉頌子 河崎衣美 熊木克治 釵持輝久 高橋健 戸田哲也 長崎雄太
奈良貴史

奈良県立橿原考古学研究所 新潟大学小片コレクション委員会

I 調査の目的

1970年初春に中峠遺跡第7次調査が終了した後、下総考古学研究会は一つの転換期を迎えたように思える。会員各位の年齢が上がるにつれて本務が多忙を極めるようになったため、第7次調査の資料整理やこれまで行ってきた同遺跡調査の報告書作成がますます遅滞しており、1970年5月の「総会」ではかなり厳しい指摘があったようである(塚田・戸田、1970a)。これを受けて同年の年次計画では、6月～7月の月例会に「中峠整理・研究」の報告が充てられている(塚田・戸田、1970b)が、実際に行なわれた同年5月～6月例会の記録を見ると、上記の議題は認められず(『下総考古学』4号 1972年の巻末「例会の記録」参照)、他の議題に差し替えられている。おそらく6月～7月例会に提示できるような整理作業の進捗がなかったため⁽¹⁾、急遽水田稔氏の卒論発表や江森正義氏の松戸市内遺跡分布調査の成果報告などが設定されたのであろう。中峠遺跡調査報告の整理が進まなかったのは、会員各位の多忙化もあるが、中峠遺跡出土遺物を収蔵している「下総史料館」(湯浅喜代治氏が私費を投じて創設)の研究棟のスペースが狭く、組織的な整理作業を進めにくかったことにも大きな原因があったと推定される。前にも記したが、土器洗浄は屋外で実施せざるを得ず、降雨にたたられたらお手上げであったのである。

しかし、1970年末になってからは環境が大きく好転する。高橋良治前代表が、私費を投じて自邸内に「文献・資料センター」を造ったのであった。この施設は、移動書棚を配備した書庫に、十数量はあるかと思われる「会議室」(「大ホール」と高橋氏個人の研究室が附設されている。会議室の前には大きな庇が延びており、その下にはコンクリートが敷かれ、雨天でも土器洗いが出来るように配慮されていた。もちろんその一角には水道と流しが用意されている。当時の在野研究者にとっては正に夢のような施設が突如出現したのである(1970年5月の総会記録では、「文献センター」を物理的に創設することなど全く想定されておらず、会員各自の持ち手文献をカードに書き出し、共同利用しようという提案がなされていたのである)。これを受けて、翌1971年の正月は中峠遺跡の調査を取りやめ、2日から4日まで2泊3日をかけて泊りがけでこれまでの中峠遺跡調査に関わる整理作業がここで実施されたのであった。塚田(1971a)によると、その間、早朝から夜遅くまで実測図・日誌・写真

などの整理が進められ、調査概報作成に向けて大きく前進したのであった。ちなみにこの合宿には延べ22人が参加したという(「お知らせ」『研究メモ』87号 1971年)。中峠遺跡第6次調査地点1号住居址に隣接した「先史地表面に穿たれたピット」中の出土遺物(大村ほか、2017)が湯浅邸からここに運び込まれたのは、この時かもしれない。なお、この合宿に引き続き同月17日に下総史料館で整理作業が行なわれている。ここでは、主に完形土器の復元、調査概報の「アウトライン」の策定に関わる協議が進められている。後者の概要は以下の通りである(「お知らせ」『研究メモ』87号 1971年)。

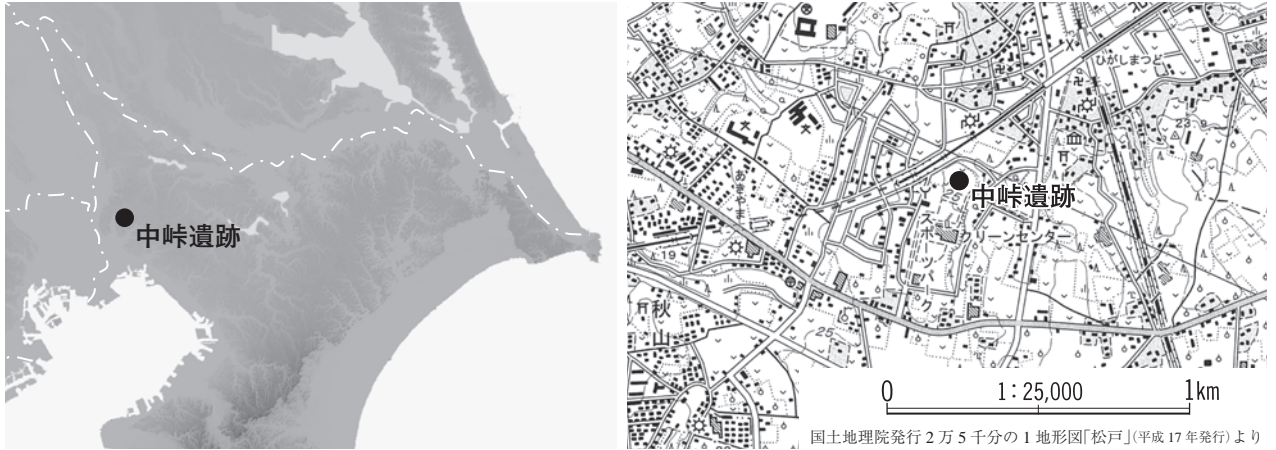
- ① 目標発行期日：1971年4月下旬
- ② 体裁：従来の下総考古学と同じで、4号(中峠遺跡特集)として発行
- ③ 総頁：48頁

実際の調査概報刊行は1976年5月であり、5年も遅延したが、「中峠遺跡発掘調査概要」を中心とした『下総考古学』6号は総頁41頁(但しこの号は従来と異なってA4判)なので、総頁は上記の「アウトライン」のそれとほとんど差異がない。調査概報の骨子は1971年に既に定まっていたといえよう。この成果を受け、この月の月例会において高橋・塚田両氏は「中峠遺跡の資料整理報告および概報(下総考古4号)刊行について」という提案を正式に行なったのであった。その後、「概報」部分の作成は、塚田氏が個別に作業を進めていったようである。同年10月刊行の『下総考古学』4号の「あとがき」では、調査概報作成の「作業は大詰め」の段階に入っていることが宣言されている(塚田、1971b)。

次いで1972年1月例会に於いて高橋・塚田両氏による「正月合宿の報告」という議題がある。中峠遺跡調査概報に関わる作業がこの時期にも行なわれたのであろう。

以上中峠遺跡の調査は、第7次調査後1971～1972年にわたって中断され、概報作成に向けた取り組みが着々と行なわれていたのであった。

このように会活動の主軸が概報作成に向けてシフトしていた矢先、降って湧いたように1972年11月例会に於いて「中峠第8次調査の是非」という議題が上がってくる。この前後、本会の連絡誌である『研究メモ』は9ヵ月ほど停刊しており、なぜこの時期に発掘の再開が提起されたのか記録が残されていないので理由が判然としない。高橋良治氏の



第1図 中峠遺跡全体測量図

遺品「下総考古学研究会関係資料」や塚田光氏の遺品（手帳類）、および小山勲氏の遺品（「下総・例会その他の記録」）にも当たってみたが、その辺の事情をメモした記録類は見いだせなかった⁽²⁾。

11月例会では当然、「軌道に乗り始めている調査概報作成を優先すべき」という意見と、「掘れる機会があったらそれを逃さず、遺構の検出に邁進すべき」という第6次調査時以来の議論が蒸し返されたのであろう。第7次調査実施に反対していた一部の中核会員たちの名前が第8次調査参加者名簿においても見つけることが出来ないの、反対意見は根強かったことが推定される。しかし、とにもかくにも1973年1月2日より第8次調査（第1図：台地北端部分）が実施に移されることとなる。推測の域を出ないが、1970年の第7次調査で確認した人骨（自然人類学専攻の小片

保会員の応援を得るため、完掘は他日を期し、そのまま埋め戻した）が劣化してしまうことも気がかりであったろう⁽³⁾。また、発掘調査には新潟大学から4人ものスタッフ（森沢佐蔵・加藤克知・古谷元康・郭美華の各氏）が初期の段階で来駕されている⁽⁴⁾ので、新潟大学からの応援態勢が整っていたということも発掘に踏み切った要因かも知れない。

かくて発掘の目的の第一に中峠集落の実体解明のため、更なる竪穴住居址のデータ蓄積をすること、第二に第7次調査地点「4号住居址」で確認された人骨を組織的に検出して「家とヒト」の関係を詳細に捉えること、を掲げて11月29日付で千葉県教育委員会ならびに文化庁記念物課宛に「埋蔵文化財発掘届」が提出されたのであった。

（大村 裕）

註

- (1) 江森正義氏によると、1970年度は毎月1回中峠遺跡出土遺物の整理を行なう予定を立てたが、12月までにたった一回しか実施できなかったという（江森、1971）。これが1971年初春に於いて、恒例の中峠遺跡発掘（第8次）を見送った要因の一つであったようである。
- (2) 中峠遺跡第8次調査に参加した、戸田哲也氏、猪越公子氏等に問い合わせたが、はっきりした記憶はないということであった。一部の中核会員（高橋良治・湯浅喜代治・塚田 光の各氏）の間で調査実施について協議し、話が進められていたようである。
- (3) 1964年に実施した第2次調査時に、竪穴住居址内から人骨が発見されたため、後日小片保会員の応援を得て再調査することとなり、ビニールで覆って一旦埋め戻したことがあった。翌年第3次調査を実施し、この人骨（第3次調査1号人骨）を再検出したところ、「やや脆くなっていた」（江森正義・大村 裕、1995：10頁）という苦い体験があるのである。
- (4) 実際に調査に参加した三門 準会員（当時高校生）の証言による。

参考・引用文献

- 江森正義 1971「研究会」『研究メモ』90
 江森正義・大村 裕 1995「人骨の出土状況」『下総考古学』14号
 大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・合田恵美子・建石 徹・千葉 毅 2017「中峠遺跡第6次調査地点1号住居址に隣接する「ピット」出土の土器群について」『下総考古学』24号
 塚田 光 1971a「新研究所の落成にことよせて」『研究メモ』87
 塚田 光 1971b「あとがき」『下総考古学』4号
 塚田 光・戸田哲也 1970a「1970年定例総会（の記録）」『研究メモ』82
 塚田 光・戸田哲也 1970b「1970年度の会運営について」『研究メモ』82

V 考察

1. 中峠遺跡第8次調査地点の1号住居址と2号住居址の新旧関係について

本調査地点で検出された1号住居址と2号住居址は、約1mの間隔をあけて近接している。屋根の葺きおろしやその外側に設けられたと推定される防水のための周堤等の存在を考慮すると、同時並存は考えにくい。また、古い住居址が窪地として残っていた可能性も限りなく低い。雨水の浸入を防ぐためにも、どちらか一方は、部分的にでも旧地表面まで完全に埋まっていなければならないのである。では1号住と2号住のうち、どちらが古いのであろうか。これらの遺構から出土した土器の検討や、覆土の観察からこの問題に接近してみたい。

1-1. 炉体土器の型式学的検討

まず両住居址に埋設された炉体土器の型式学的検討を行ない、型式学上の新旧を見極め、竪穴住居構築時の新旧の見通しを立ててみる(第60図)。

1号住の炉体土器の特徴は以下の通りである。

- a. 強く内湾するキャリパー形深鉢。
- b. 口縁に大小の突起が4つ存在。
- c. 口縁直下に隆線が貼付けられ、隆線脇に沈線が引かれる。沈線は突起頂部の渦巻文と連結する。
- d. 背割隆線によって、変形したクランク状文や横ワラビ状文、および剣先状文が変形して鳥の頭部を想わせるような形態となった貼付け意匠文(上面には沈線によるワラビ状文と「眼」を彷彿とさせる円文が加えられている)などが施されている。
- e. 隆線は指頭で強く撫でて圧着している。隆線の両脇には沈線が丁寧に沿う。ただし、口辺部文様帯の下端を画する隆線においては、上方のみ沈線が沿い、下方は撫でにより調整されている。
- f. 変形したクランク状文の屈曲部は文様帯の上下を画する隆線と接続していない。
- g. 隆線によるワラビ状文や、鳥の頭部状の貼付け意匠文上に施された「渦巻」の部分は、強く隆起し、上面から見ると短い嘴のような平面形態をしている。
- h. 地紋の縄紋は、基本的に0段多条(RL)の縄を口縁から体部にかけて縦方向に転がしているが、口辺部の一

部に横位回転が認められる。

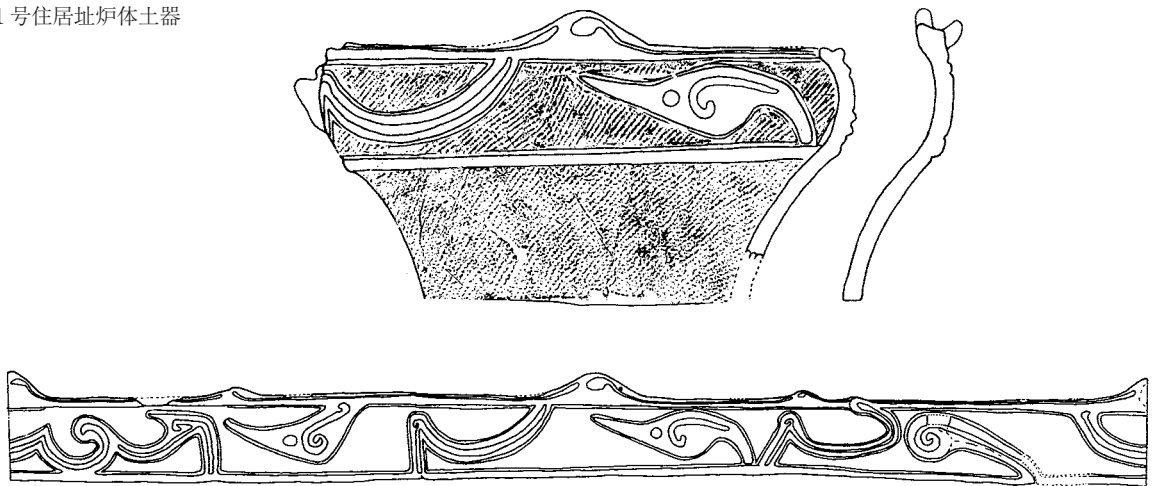
2号住の炉体土器の特徴は以下の通りである。

- a. 強く内湾するキャリパー形深鉢。
- b. 口縁に同じ大きさの突起が4つ存在。
- c. 口縁直下に隆線が貼付けられ、隆線脇に沈線が引かれる。沈線は突起頂部の渦巻文と連結する。
- d. 1号住に存在した背割隆線による変形したクランク状文が4つ施されている。クランク状文の屈曲部はせり上がり、口辺部文様帯の上側を画する隆帯とくっつき、半楕円区画を構成している。
- e. 1号住炉体土器において認められた鳥の頭部を想わせる貼付け意匠文は、両端が剣先状に変形しており、上面には「眼」を想わせるような三角形の図形が描かれている。
- f. 隆線は指頭で強く撫でて圧着している。隆線の両脇には沈線が丁寧に沿う。
- g. 口辺部文様帯の下端を画する隆線の下側には沈線が沿わない。
- h. 地紋の縄紋は0段多条(RL)の縄を口辺部から体部にかけて縦方向に転がしている。

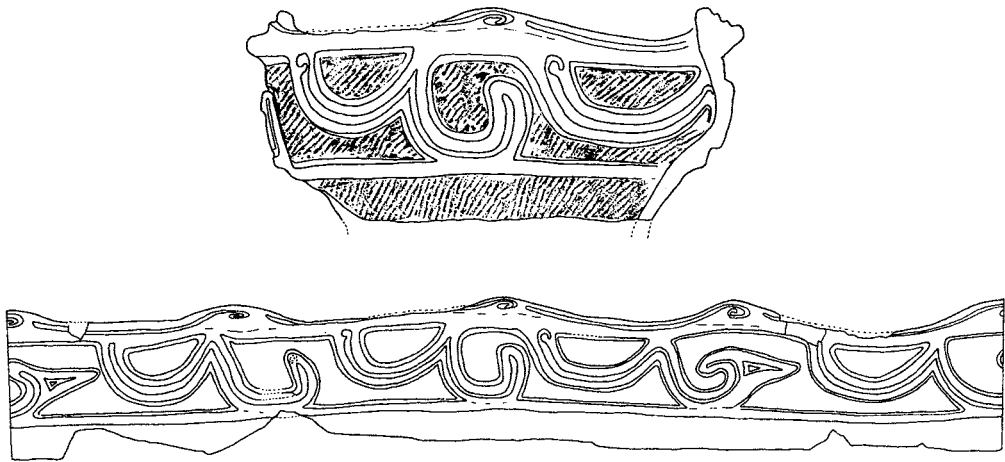
両者共に口縁に突起を持ち、背割隆線でゆがんだクランク状文を構成している点で、加曾利E1式に相当することは間違いないであろう。また、両者共に隆線の両脇を細い沈線で忠実になぞっている点は、加曾利E2式に通じる部分があり、加曾利E1式でも新しい要素を持っていると評価出来る。ただし、2号住炉体土器は、口辺部文様帯において「区画」を指向している点においてより新しい傾向が認められる。一方、1号住炉体土器では、隆線の一部が強く隆起している(上面形態は短い嘴のようにになっている)点は、勝坂式以来の伝統として古い様相を遺しているといえる。型式学的には1号住炉体土器の方が2号住炉体土器よりも多少古い要素を持っていると評価出来る。

なお、1号住炉体土器と2号住炉体土器は、上述のように多少の相違はあるものの、文様構成や単位文様の配置などがよく類似しており、同一製作者の手になるものか、あるいは二つの土器のうち、何れかを手本にして(あるいは伝習して)製作したものとの印象が強い。

1号住居址炉体土器



2号住居址炉体土器



第60図 1号住居址炉体土器と2号住居址炉体土器の比較

1-2. 住居址覆土の堆積状況の検討

次に住居址覆土の検討から1号住と2号住の新旧関係を推定してみる。

1号住覆土の堆積状況(第13図参照)の特徴を列举すれば以下の通りである。

- a. 最下層の7層(大きなロームブロックを含む茶褐色土)は硬くしまっており、床面から竪穴切り込み面まで厚く堆積している。上面は平坦で、西側では、その上に暗褐色～黒褐色土が薄く覆っている。
- b. 覆土7層は西壁から約60cm内側に入ったところでほぼ垂直に掘り込まれたように床面まで落ち込んでおり、東壁においても30～50cm内側に入ったところで直線的に落ち込んでいる。この切断面と思われるラインは南北土手南半において平面的にも観察さ

れている(第5図および巻頭図版Ⅵ参照)。これらの事実から、覆土7層が堆積した後、何らかの理由で住居址中央部が一旦掘り込まれた可能性がある。

- c. 掘り込まれたと推定されるスペースに堆積した覆土は、貝やロームブロックを含む茶褐色土で、軟らかかったという観察所見がある。

2号住覆土の堆積状況(第40図参照)の特徴は以下の通りである。

- a. 最下層の覆土6層(大きなロームブロックを含む茶褐色土層 以下「茶褐色土」と省略)は西側の壁際において1号住同様、竪穴切り込み面まで厚く堆積しており、竪穴中央部でも20～30cmの厚さで堆積している。
- b. 1号住居址に近接する東側の壁付近においては、西側の壁際のように茶褐色土(6層)が竪穴掘り込み面まで

VI まとめ

中峠遺跡第8次調査(以下第8次調査)の正式報告を、『下総考古学』25号として、ここに上梓する。下総考古学研究会が第8次調査を実施したのは1973年1月、年明け早々の2日から正月休みを主に利用した調査であった。下総考古学研究会の調査では通例のこととなってしまったが、調査から報告書の刊行まで、実に長い歳月が流れた。前回の第7次調査の報告からも、すでに3年を経過し、正式な報告書の刊行が遅くなったことは、率直にお詫び申し上げたい。ただ、この時間は決して無駄であったわけではなく、報告できた内容は、調査当時から思いもよらない、考古学的に重要な成果を引き出したものとなった、といえよう。

第8次調査を実施した経緯は、「I」で詳しく述べたとおりであるが、第7次調査で設定したB・C・Dトレンチで確認した住居址2軒について、本格的な発掘調査を実施したものである。第7次調査B・C・Dトレンチでは、トレンチ内で住居址2軒を確認したものの、うち1軒から人骨の一部を検出し、埋葬人骨の存在が確実とかがわれたため、調査予定期間に住居址を完掘することはできないと判断し、トレンチ全体を埋め戻したものである。

第7次調査は1969年末から1970年初春に実施したが、第8次調査の開始は、3年を経た1973年初春となった。なぜ3年もの間、調査の空隙があったのか、残された記録が少なく、その理由は判然としないが、おそらくは、既往の中峠遺跡調査の整理作業を優先させたものと思われる。下総考古学研究会としては、第6次調査、第7次調査において、集落範囲を横断する形で台地上に長大なトレンチ(台地横断トレンチ)を入れることに成功し、「集落構造の一端の解明」という目的に対して多大な成果をすでに得ていた。また、個々の住居址については、これまでの調査で十分な調査例があり、特に第4～6次調査では、「中峠式」にかかる住居址のデータも持っていたことから、そうした成果を早く整理し、世に問いたい、という気持ちも強かったことが想像できる。第7次調査B・C・Dトレンチで確認した住居址は、出土した遺物から加曽利E1式期以降のものであることが確実と考えられ、会の当時の大きな関心事項であった「中峠式」とのかかわりはやや薄く、かつ、埋葬人骨が存在するという、発掘調査するにはある意

味、「手間のかかる」住居址であったといえる。このことは、第7次調査終了後、即座に次の調査を行うという決断につながらなかった一因と想像される。

第8次調査開始の直接の契機は今となっては不明であるが、「I」で述べられた通り、埋葬人骨の調査にあたり、新潟大学の調査協力が得られる体制となったことは、調査を再開する大きな後押しとなったものと思う。第5次調査の際の埋葬人骨調査の反省を生かし、縄紋中期の埋葬習俗の解明の一助となる調査の機会と考えたものと思われる。かくして、第8次調査は、中峠集落における住居址の追加データの収集とともに、埋葬人骨の調査を行い「ヒトと家との関係」を捉えることを具体的な調査目的として、発掘調査が実施されることとなったのである。

第8次調査の調査経過は、「II」に、調査日誌の読み解きという形で示した。これも件の通りであるが、報告書作成に関わった会員の大部分は、実際の中峠遺跡発掘調査には参加しておらず、残された日誌が、調査状況を知るためのほぼ唯一の手掛かりとなっている。日誌には、図面や写真だけでは読み取れない、重要な所見等が残されており、調査日誌の類が発掘調査においていかに大切かが、今回の報告書作成の際にも痛感された。第8次調査には、当時高校生であった三門準会員が参加しており、今回の報告にあたって、貴重な証言を多く聞くことができた。

「III」、「IV」で発掘調査の成果に係る具体的なデータを示した。前述のとおり、第7次調査のトレンチで住居址を一度確認している関係から、「III」では1970年に調査したB・C・Dトレンチの調査成果を記載した。第7次調査で「4号住居址」としたものが、第8次調査1号住居址、第7次調査で「5号住居址」としたものが、第8次調査2号住居址となる。

「IV」では、第8次調査の成果である1号住居址と2号住居址について記載した。2つの住居址の竪穴は、重複しないものの最短1mほどで接するように位置しており、この2軒の住居が同時には存在していなかったと推定される。2軒の住居址にはそれぞれ炉体土器が残されていたが、いずれも加曽利E1式新で、よく似た様相を持つ土器であった。1号住居址は、覆土中に貝層が形成されており、床面付近より、4体の埋葬人骨が検出された。2号住居址も覆土上部に混土貝層が存在したが、埋葬人骨はなかった

〔付編 1〕

中峠遺跡第 8 次調査出土の動物遺体 (含：人骨破片)

植 月 学

I. はじめに

本稿では中峠遺跡第 8 次調査において採取された動物遺体と動物遺体中に含まれていた人骨について報告する。本地点では 1 号住居址と 2 号住居址から貝層が検出されている。動物遺体は両遺構を中心に出土しているが、ラベルの消失により出土地点が不明確な資料が一部存在する。1 号住居址覆土出土土器は加曽利 E1 式、2 号住居址覆土出土土器は加曽利 E1 式を中心とする。

II. 試料と分析方法

1. 試料

試料は調査時に肉眼観察により取り上げられた標本類 (以下現場採取試料) と、貝層サンプルの水洗選別により得られた試料 (以下水洗選別試料) とに分けられる。これらには袋ごとに 1~71 の整理番号を付した (第 1 表)。中には「貝層サンプル」などと表記され、貝を多数含む袋も存在した。しかし、内容を確認すると一定の範囲の堆積物を全量採取したとは考えにくいものもある。これらについては 6 次、7 次調査と同様に次のいずれかの基準を満たすものをサンプルと判断した。

- (1) 貝類の組成が均等ではなく特定種に偏る
- (2) 土や破砕貝が多く混入する

この基準により 1 号住居址では 14 ~ 19 が貝層サンプルと判断された。ただし、15 のようにアカニシやツメタガイを不自然に多く含むなど、全量採取のサンプルかは疑問が残るものがある。土の含有量も全体に少なく、主に貝の採取を目的としたサンプリングである可能性に留意する必要がある。2 号住居址では 51 が灰を中心としたサンプルで、52 も貝をやや多く含むが、「溝状攪乱」との注記がある。その他にも貝を主体とする袋はあるが、様々な種を少しずつ含み、標本用に選んで採取したものと推測される。第 1 表の「採取区分」に貝層サンプルと標本採取用の判断結果を示した。

2. 処理と標本の抽出

現場採取試料は必要に応じて水洗をおこなった。貝層サンプルと標本採集は一部細かい土も含まれていたため、4、2、1mm の試験フルイにより水洗選別をおこなった。標本の抽出は貝層サンプルの 4~1mm を含むすべての試料からおこなった。巻貝類については殻頂部・殻口部、二枚貝類については殻頂部を残す標本を抽出した。その他の動物遺体は部位の明らかな標本を抽出した。

3. 同定・集計・計測

同定は基本的に現生標本との比較によりおこなった。巻貝類は殻頂部および殻口部により、二枚貝類は殻頂部により同定をおこなった。巻貝は殻頂部と殻口部のうち多い方、二枚貝は左右のうち多い方により集計した。コウイカ類の甲、ウニ類、フジツボ類は破片数を集計した。

魚類は主上顎骨、前上顎骨、口蓋骨、歯骨、角骨、方骨、舌顎骨、主鰓蓋骨、椎骨の全標本を同定対象とした (これらについては未同定標本も結果に示した)。その他部位でも種によって特徴的な部位は適宜同定対象とした。哺乳類については同定可能な全部位を対象とした。四肢骨は骨端およびその付近を残す標本はすべて対象とし、骨幹部破片については全周するもののみ対象とした。いずれも計数点を定め、集計の際に重複のないよう留意した。

人骨については 1 号住居址出土の埋葬人骨との関係も考えられることから、すべての破片を対象とした。埋葬人骨が保管されている新潟大学医学部において資料を実見し、個体のマッチングをおこなった。

貝類ではハマグリについて殻長、殻高の計測をおこなった。いずれも方眼紙上に置き、1mm 単位で計測した。脊椎動物遺体については計測可能な部位について適宜計測し、一覧表 (第 6 表) に記載した。

III. 分析結果と考察

1. 無脊椎動物

貝類 腹足綱 16 分類群 (うち陸産 5)、二枚貝綱 17 分類群が同定された (第 2 表)。

〔付編 2〕

中峠遺跡第 8 次調査第 2 号住居址炉体土器およびこれと同一個体の可能性ある土器片の胎土分析

建石 徹・奥山 誠義・小倉 頌子・河崎 衣美

1. はじめに

千葉県松戸市中峠遺跡第 8 次調査で出土した第 2 号住居址炉体土器（加曾利 E1 式）および型式学的な検討等によりこれと同一個体の可能性があると考えた同第 1 号住居址出土土器片（いずれも第 2 号住居址炉体土器との接合関係は認められていない）の胎土分析を実施したので、分析の方法と得られた結果を報告する。胎土分析によりこれらが同一個体である可能性が高まれば、それらの出土位置の検討等から、両遺構の新旧関係等に関する知見が得られること等を期待した。

2. 資料（試料）

中峠遺跡第 8 次調査出土縄文土器のうち、胎土分析に供した資料は、第 2 号住居址炉体土器（分析 No.6）と、型式学的な検討等によりこれと同一個体の可能性があると考えた同第 1 号住居址出土土器片（分析 No.1～5）の計 6 点（本誌中峠遺跡第 8 次調査報告第 64 図参照）。分析 No.1～5 は、いずれも第 2 号住居址炉体土器と縄文の特徴（0 段多条、RL）や器面の質感等が類似する。

各資料の出土位置（住居址内の出土地区、出土層位）等を第 1 表に示した。分析資料の選定は下総考古学研究会会員各氏による。

3. 胎土分析の方法

（1）蛍光 X 線分析による化学組成の検討

胎土の各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光 X 線分析（非破壊法）を用いた。測定条件は下記の通りである。

分析装置：日本電子社製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3100R II、線源ターゲット：ロジウム（Rh）管球、管電圧：30kV、X 線照射径：φ 1.0mm、測定雰囲気：真空、測定時間：300 秒、定量分析の計算法：FP 法、標準試料：なし。

縄文土器の主成分元素と考えられるナトリウム（Na）、マグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）の 9 元素と、産地分析等における有効な指標元素とされる微量成分元素であるルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）の 3 元素を加えた 12 元素の測定をおこなった。

分析に際しては機器に備えられた CCD カメラの画像観察により、X 線照射範囲（分析範囲）に大粒の粒子がなるべく含まれないよう配慮した。X 線照射範囲の決定に際しては、なるべく平滑な面に X 線を照射することにも心がけた。

（2）肉眼観察による大粒粒子の検討

胎土中の大粒粒子（混和材の可能性が高い）を検討するた

第 1 表 胎土分析の結果（wt%）（蛍光 X 線分析結果は 12 元素の総和を 100 とし、酸化物の重量比で表記した）

分析 No.	遺構	出土位置等	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	肉眼観察の結果
1	1号住	4区2層	0.06	0.53	23.34	36.10	0.96	7.09	2.36	0.53	28.68	0.07	0.17	0.12	白色粒子、スコリア
2	1号住	4区2層	0.07	0.28	21.92	49.05	2.37	7.48	3.46	0.20	14.86	0.04	0.14	0.12	白色粒子、スコリア、石英
3	1号住	4区5層	0.25	0.46	22.01	39.39	2.75	7.04	3.19	0.58	23.99	0.06	0.16	0.12	白色粒子、雲母類、スコリア
4	1号住	4区6層	検出限界以下	0.74	20.46	40.59	1.11	7.39	2.73	0.29	26.35	0.02	0.23	0.10	白色粒子、スコリア
5	1号住	3区5層	0.42	0.86	19.05	45.84	1.81	8.33	2.01	0.37	20.99	0.04	0.16	0.11	白色粒子、スコリア
6	2号住	炉体土器	1.04	4.28	21.53	36.58	1.39	17.50	2.24	0.21	15.01	0.02	0.12	0.08	白色粒子、スコリア

中峠遺跡第 8 次調査出土人骨にみられた齧痕と埋葬環境復元における意味

植月 学

1. はじめに

第 8 次調査では 1 号住居址から縄文時代中期後葉加曽利 E1 式期に属する 4 体の人骨が出土している。これらは新潟大学に小片コレクションとして所蔵されている。2018 年 6 月に下総考古学研究会により同人骨群の調査が行われた際、筆者は主に齧歯類によると想定された引っかき傷状の線状痕の有無を調査した。その結果、会員諸氏とともにその存在と位置を確認、記録することができた。当初は齧歯類によるものと推測していたが、先行研究をひも解く中で、疑問が生じた。このため、2019 年 7 月に再度調査をおこない、形状や大きさなどより詳細な記録をおこなった。そこで、本稿ではこれらの齧痕について記載し、その成因と埋葬環境復元における意味について考察をおこなう。

2. 資料と方法

4 体の人骨について、頭骨（頭蓋骨・下顎骨）および主要な四肢骨（上肢：上腕骨、橈骨、尺骨。下肢：大腿骨、脛骨）を対象として、齧痕の観察と記録をおこなった。記録した項目は齧痕の性状については形状、1 本あたりの幅と長さ、連続する場合の分布範囲、本数、互いの関係（ペアの有無、方向）である。人骨との関係では部位と位置を記録した。

3. 観察結果

3-1. 齧痕の性状

形状は爪の先程度のゆるやかな弧状を呈する。重複が多く、単位を把握することが難しいが、比較的重複が少ないもので計測すると、線の長さは多くの場合 4~6mm である（例：第 2 図 4）。重複がなく、浅いものだと長さが 2mm 程度の場合もある（第 4 図 2）。線の幅（太さ）は細く、0.7~0.8mm 程度である。断面形は底面が V 字~U 字を呈し、平坦ではない。

単体で存在することはなく、常に重複、密集して分布範囲を形成する。分布範囲は径 1cm 前後の場合が多いが、中には 5~10cm ほどにわたってキャタピラ状に続く場合

もある（第 2 図 1）。したがって弧の方向もほぼ一定だが、若干ぶれていて、互いに完全に平行となることはない。つまり、ペアをなす状況は観察できなかった。また、一箇所集中した結果、穴状となる例（第 2 図 5）、深くえぐられる例（第 4 図 16）もみられる。

ただし、中にはより幅が太く直線的で同種の生物によるとは考えにくい例（第 3 図 6、7）、重複や風化により単位が判然とせず判断が難しい例（第 4 図 12、14、18 など）も存在する。したがって、すべてが同一種によるものかはおお検討の余地がある。

3-2. 人骨との関係

第 1 図に人骨ごとに齧痕が観察された位置を示した。そもそも残存していない部位を区別するために残存部位を塗りつぶした。まず人骨によって出現頻度に差があり、1~3 号人骨は比較的多く見られるのに対し、4 号人骨ではまったく観察できなかった。次に、同じ人骨でも上肢/下肢や左右で頻度に差があった。2 号人骨は上肢よりも下肢で顕著であり、3 号人骨では上肢、特に右側に顕著であった。ただし、下肢や左半身が残存していないため本来の偏りかは不明である。最後に骨の中での位置に着目すると、骨幹部に集中し、骨端には稀という特徴があった。また、頭蓋骨にも普通に見られた。

なお、動物遺体中に混入していた 2 号住出土人骨の大腿骨と脛骨にも骨幹部に同様の痕跡が認められた（付編 1 図版 6）。

4. 考察

4-1. 原因生物

骨をかじる生物としてはイヌなどの食肉類、ネズミなどの齧歯類、昆虫などが知られる。今回の齧痕はイヌやオオカミが残すいくつかの痕跡（Binford 1981）とはまったく一致しない。筆者はこの Binford の事例にもとづき、千葉県六通貝塚において咬痕の例を多数確認、報告したことがある（植月 2010）。たとえば、歯牙先端による緻密質の陥

〔付編 4〕

中峠遺跡第8次調査第1号住居址内における人骨の出土状況について

山田 康弘

1. はじめに

1973年に行われた中峠遺跡の第8次調査では、1号住居址より大人の男女各1個体と子供2個体分、合計4個体分が出土している。これらの人骨の出土状況についてはすでに江森正義氏によって、その概要が報告されている(江森1995)。また、これらの人骨の形質的な情報については、森本岩太郎・吉田俊爾氏によって報告がなされている(森本他1995)。

今回、下総考古学研究会のご厚意により、これらの人骨の出土状況について再検討する機会をいただいた。また、新潟大学医学部のご高配により、これらの人骨を実見する機会を得た。本稿ではこれらの人骨の出土状況を検討し、当時の墓制の一端を明らかにしようと試みるものである。

2. 各人骨の出土状況

先に述べたように第8次調査出土人骨の概要は、すでに『下総考古学』第14号に発表されている(江森1995、森本他1995)。ここでは、そこに記された情報を元にしなが、その出土状況を再検討してみたい。

1号人骨

壮年期段階の女性と鑑定されている。江森によれば「1号人骨は住居址北側の床面より、頭を西北西にむけて仰臥の状態出土した成人女性人骨である。下顎から胸にかけては攪乱が激しい。顔は軽く西を向き、左上肢は体側で肘を上方に曲げ、右上肢は攪乱されていた。上腕骨脇より貝輪が検出されている。右下肢は自然に伸ばしているが、大腿骨は外側に開いていた。左下肢はさらに大きく開いている」とされている(江森1995)。

写真1・2・3は、その出土状況を写したものである。これを見ると、1号人骨と住居址床面の間には土壌の顕著な堆積は見られず、遺体は住居の床面に置かれたものと考えられる。また、両脚は柱穴を避けるように広がっており(写真1・3)、遺体が腐敗し一部が移動した段階で、柱が立っていた状況、すなわち上屋構造が存在していたと思われる。



写真1 中峠遺跡1号住居址1号人骨出土状況(1)

そうだとすれば、1号人骨は、柱と柱の間に置かれたものと考えられる。

頭蓋は上を向き、下顎の位置が離れているが、これは腐敗に伴い下顎が落ち、頭蓋が後方に転移したためと考えられる。遺体腐敗時に周辺に空間が存在した証拠である。

右上肢は肘関節で強く曲げられていたようだが、尺骨が人骨から見て右方へ離れた位置で見つかり(写真3)、また橈骨もやや動いていることから、上肢が腐敗し、骨化した段階において周辺に空隙環境が存在した可能性が高い。

右上腕骨の近位端部に接してアカニシ製の腕飾りが存在する(写真2)。尺骨の遠位端部は破損しており確認できないが、橈骨の遠位端部には手ひどい変形関節症が確認で

中峠遺跡第 8 次調査出土土器の文様割付

小林 謙一

1. 土器の文様割付

土器製作者が、縄紋土器をつくる際に文様デザインをどのように器面に配するか、を文様割付とよぶ(小林 2000)。割付の角度とした、区画の角度の測定の方法は旧稿に準拠するが、繰り返し文様のポイントとなる区画点を決めて、その位置を円周上に配し、任意の点(割付の最初のスタート点)がわかる場合はそこから、また胴部は口縁部の最初とした区画点を基準点として、そこからの角度を計測した。よって、最初の点は 0 度、そこから 359 度までの角度で表記した(第 1 表)。口縁部・口辺部の計測点は 1～、頸部・胴部の計測点は a～の記号を付した。

以前の筆者の検討に従い、区画配分の方法を「割付タイプ」として区分する。基本的に、旧稿(小林 2000)での割付タイプ a～f の分類を用いる。

2. 中峠遺跡第 8 次調査出土土器の文様割付

口縁部から胴部にかけて全周が遺存し、文様割付全体が復元可能な土器 8 個体について、割付を記録した(第 1 図・第 2 図)。

No.1 第 8 次 1 住炉体土器である。加曽利 E1 式土器。口縁部から頸部遺存個体で、口唇上の突起 4 単位について計測した。文様割付のスタート位置は不明なため、任意の突起を基準点として、その突起 1 から各突起部の先端位置までの角度を計測した。突起 1 から 2 の間は 65 度、2 か

ら 3 は 109 度、3 から 4 は 66 度、4 から 1 は 120 度の間隔である。口唇上突起間は狭い間隔と広い間隔を交互に配しており、その下位の口辺部文様帯に 6 単位の隆帯文様が配されるが、狭い間隔には 1 単位、広い間隔の部分には 2 単位の隆帯文様が配されるようである。狭い・広い間隔の組み合わせとしては、その角度が 120 度・60 度の組み合わせに近いものの最大 11 度の差異が生じており、間隔は一定・正確とはいえず、目分量でおこなっているようではあるものの、一定に割り付ける意識があるものと思われる、すくなくとも成り行き施文ではない。均等割付ではないが特定の規則性を有する分割とみられ、小林の割り付けタイプで c タイプに分類される。

No.2 第 8 次 2 住炉体土器である。加曽利 E1 式土器。口縁部から頸部遺存個体で、口唇上の突起 4 単位について計測した。割付のスタート地点は不明であるが、口辺部文様に配される隆線意匠の始点と突起中心が最も近い位置にある突起を任意に基準点として、そこから各突起間の間隔の角度を計測した。突起 1 から 2 の間隔は 85 度、突起 2 から 3 の間隔は 95 度、突起 3 から 4 の間隔は 80 度、突起 4 から 1 の間隔は 100 度である。口辺部文様帯には、突起部を中心に隆線意匠が配されている。任意のスタート地点が最も文様がきれいにそろっている点であることから施文スタートの地点である可能性があり、そうであるならばおおよそ 90 度で目分量に均等に割り付け、最後にやや広い間隔を残した可能性が考えられる。10 度以内程度の

第 1 表 中峠遺跡第 8 次調査出土土器文様割付計測角度一覧

資料 No.	図番号	部位	単位	角度 1	角度 2	角度 3	角度 4	角度 5	角度 6	角度 7	角度 8	口径 (cm)	胴径 (cm)	型式	割付								
No.1	1 住 1 (炉体)	口辺	4	1	0	2	65	3	174	4	240					加曽利 E1	c						
No.2	2 住 1 (炉体)	口辺	4	1	0	2	85	3	180	4	260					加曽利 E1	a2						
No.3	1 住 4	口辺	4	1	0	2	89	3	181	4	283					加曽利 E1	a2						
No.4	1 住 8	胴	8	a	0	b	32	c	90	d	142	e	200	f	243	g	282	h	334	23.7		加曽利 E1	d
No.5	1 住 6	胴	3	a	0	b	122	c	229													加曽利 E1	a2
No.6	1 住 5	胴	4	a	0	b	75	c	181	d	278											加曽利 E1	a2

房総地域の縄文時代中期の大形石鏃

—— 東長山野型石鏃の展開とその意義 ——

大工原 豊

はじめに

房総地域では縄文時代中期には、黒曜石が大量出土することが知られている。前期では伊豆半島→相模野地域を経由して搬入されるので流通圏の末端に位置する房総地域では出土量が少ないことが判明している(大工原 2002)。しかし、中期前葉になると房総半島へ直接神津島産黒曜石が搬入されるようになり様相は一変する。この時期以降、房総地域は関東地方で最も黒曜石が多用されることになるのである。

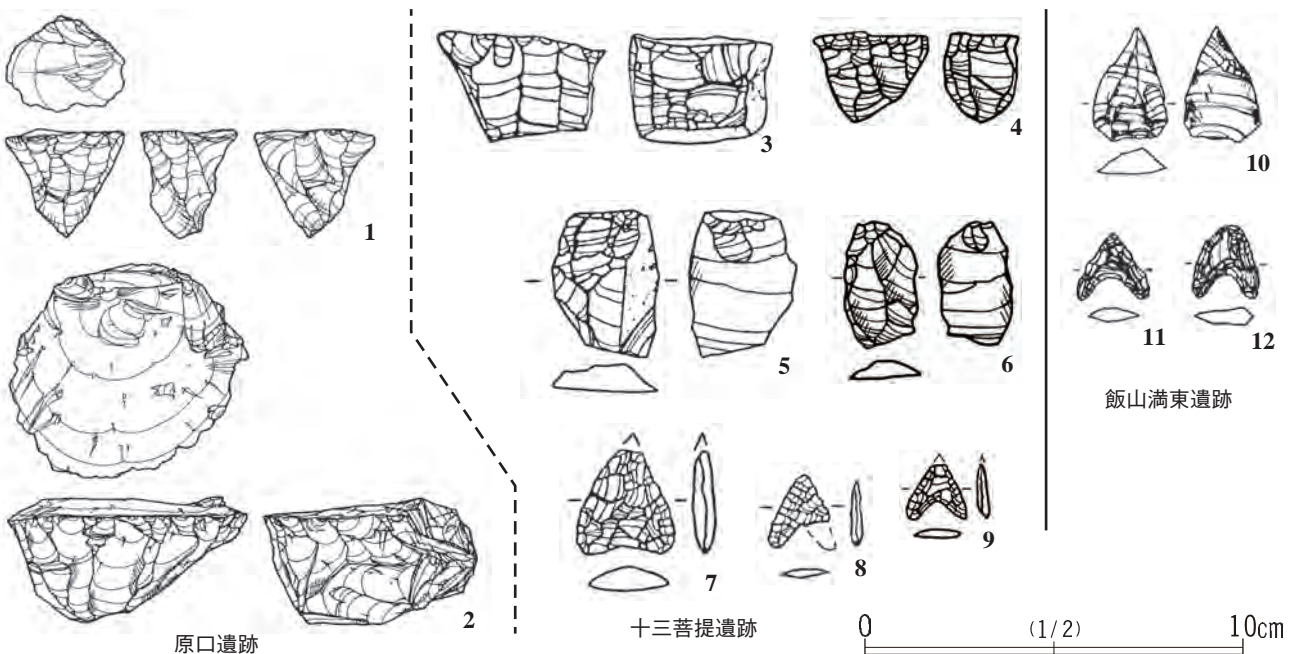
それを象徴するものが黒曜石製の大型石鏃(長さ35cm以上)の存在である。筆者は関東地域の石鏃の編年作業を行う過程で、その存在に注目し(仮称)東長山野型石鏃として取り上げた(大工原 2017)。この段階では、特徴的な石鏃型式が存在することを指摘するにとどまり、その実態を解明するまでには至らなかった。そこで、本稿ではさらに詳しく房総地域の中期の黒曜石製石鏃の動態について、技術形態的に把握することにより、大型石鏃の展開とその意

義について検討する。

また、石鏃型式はどのような構造を有しており、どんな文化現象を反映しているのかについても、東長山野型石鏃の型式設定を通じて言及してみたい。

1. 前期末葉の黒曜石製石鏃の製作技法

前期末葉には相模野地域において、黒曜石製石鏃の製作には特徴的な剥片剥離技法(十三菩提技法)が採用されている。この技法は、塊状の分厚いブランクの平坦面を打面として、水平回転させながら連続的に長さ3~4cm・幅2~3cmの幅広の石刃状剥片(第1図5・6)が剥離する技法である。そして、これらの剥片は石鏃素材剥片(以下素材剥片と呼ぶ)として用いられる極めて合理的な技法である(大工原 2002)。十三菩提遺跡(第1図3・4: 神奈川県教育委員会 1971)や原口遺跡(第1図1・2: かながわ考古学財団 2002)において、この技法の石核が多数検出されている。円錐形の残核特徴であり、一見すると旧石器時代の石核と見紛うものである。



第1図 十三菩提技法の石核・素材剥片・石鏃

あとがき

ここによりやく中峠遺跡第8次調査報告まで辿り着けた。思えば長い道のりであった。中峠遺跡調査の本報告作成に実質的にわれわれが着手したのは1988年後半。今から32年も前のことである。この当時、実際に遺物や遺構図面の整理を行っていたのは、三門準会員と私の二人だけであった。三門会員には、何度も拙宅に泊まってもらって、深夜まで一緒に作業した思い出は懐かしい。現在は新しい世代の若くて優秀な仲間たちがそれぞれの分担を精力的にこなしており、以前には想像も出来ないほど質量ともに優れた報告書が作成出来たことはまことに喜ばしい限りである。しかしそれらの成果が生まれたのも、諸先輩方が残して下さった詳細な出土遺物の位置情報(平面的・層位的)および調査日誌や図面・写真類があったからこそである。そして何よりも、そうした貴重な資料を保管する下総史料館(故湯浅喜代治会員が私財を投じて創設)および文献・資料センター(故高橋良治会員が私財を投じて創設)が存在していたことを忘れてはなるまい。調査報告の次数が重なる度に、諸先輩方への感謝と尊敬の念が高まってくることを抑えることが出来ない次第である。

なお今回の報告書作成に当たっては、土器の胎土分析において榎原考古学研究所の奥山誠義・小倉頌子・河崎衣美各氏のご協力を頂き、石器類の整理分析では縄紋石器研究に詳しい大工原豊氏に分担して頂いている。零細な資料でも、明快な問題意識を以て研究を行なうと、こんなにも生き生きとした情報に生まれ変わるということを改めて感じている。さらに中峠遺跡第8次調査地点1号住居址から出土した4体の人骨の埋葬状態について、縄紋式の埋葬に詳しい山田康弘氏から貴重な論考を頂戴している。結論としては、中峠遺跡第8次調査地点1号住居址から出土した4体の人骨は、出土状態から見て「一つの核家族が埋葬された」可能性がある、という。今回はミトコンドリアDNAや炭素・窒素同位体比分析による食性復元の試みなどは実施出来なかったが、将来そうした分析が可能になり、この推定の蓋然性がさらに高められることを切に望むものである。ちなみに、4体の人骨群を土が覆っていたか否かの評価については、動物考古学的視点から検討した植月論考を併せて熟読して頂くことを希望する。

今回の報告で、これまでに本会が検出した遺構(竪穴住居址、小竪穴)のデータはすべて提示したことになる。こ

れを踏まえて本次報告書の「考察. 3」では、中峠集落の実態復元に関わる見通しを展開したが、単なる「穴ほこ」の配置を分析するのではなく、竪穴住居のライフサイクルの復元をして往時の集落景観を推定するという試みは、本会の新しい研究方向を示唆するものとなっている。

さて本会は2014年以来、中峠遺跡調査報告作成の作業だけではなく、阿玉台式土器の共同研究にも取り組んでいる。今回は5本の論文が完成し、公表することが出来た。内訳は学史的な研究が4本、阿玉台式土器出土遺跡の調査報告の分析が1本である。冒頭の大村による西村1960論文の分析は、学史的に名高い西村1972論文の骨子が、すでに1960年にはほぼ出来上がっていたこと、そしてこの成果が当時の学界ではほとんど浸透しなかった背景について考察している。小林謙一会員による西村1972などの分析は、西村正衛に教えを受けていた折の見聞を踏まえ、その成立の背景や山内清男の影響の有無等を探っている。後者の指摘については、大村による20数年来の見解と若干の相違があるが、先学の業績の評価は種々あってよいと思われる。次に、大村による佐藤1974論文の分析は、佐藤達夫の「土器型式」の概念の整理と、阿玉台Ib式を新旧二つに分けた根拠と背景等を探っている。小澤政彦会員の論文は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による集成的研究(1982年)のうち、阿玉台式土器関連に絞ってその実態と問題点を浮き彫りにしたものである。「事業団」のこの編年は、多くの研究者に迎えられているが、その背景にも言及している。合田恵美子会員による東京都中袋遺跡2号住居址出土中期縄紋土器の吟味とその出土層位の検討は、本会の研究手法を実践したものである。結論として、武蔵野台地においては、阿玉台IV式が勝坂Ⅲ～Ⅳ式に並行する可能性を指摘しているが、下総地域においては、阿玉台IV式は勝坂V式ならびに「中峠式」各型深鉢や加曾利E式初頭の土器と一緒に出土する事例がいくつか確認されている。両者の齟齬がどうして生じるのか、今後の検討課題といえよう。今は性急に結論を出さず、今後も事例の蓄積と分析を進めたいと考えている。最後の、大工原豊氏による論文は、中峠8次1住居址の大形石鏃に因む研究である。

なお、いつもながら、本誌のデータ編集は千葉毅会員が担当し、合田恵美子・小澤政彦・金子悠人の各会員が協力した。

(大村 裕)

下総考古学 25

〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）
千葉県松戸市中峠遺跡第8次調査の成果



2020年5月24日発行



発行 **下総考古学研究会**
(代表 大村 裕)
〒285-0866 千葉県佐倉市臼井台 213-19

印刷 株式会社 TAKT-JAPAN

下総考古学 近刊バックナンバーのご案内

23 下総考古学研究会創立 50 周年記念号

和島誠一の精神—下総考古学研究会創立の学史的背景— 大村 裕

〈特集〉千葉県松戸市中峠遺跡第 6 次調査の成果

千葉県松戸市中峠遺跡第 6 次調査報告 下総考古学研究会

中峠遺跡第 6 次調査 1 号住居址出土の動物遺体 植月 学

中峠遺跡第 6 次調査の石器群について 大工原 豊

中峠遺跡第 6 次調査出土黒曜石資料の分析 建石 徹・大工原 豊・二宮修治

中峠遺跡第 6 次調査から出土した石器の残存デンプン分析 渋谷綾子

中峠遺跡第 6 次 1 住型深鉢の研究 小澤政彦・合田恵美子・千葉 毅・

建石 徹・大内千年・大村 裕

中峠遺跡第 6 次調査出土縄文土器の顔料分析 建石 徹

角張淳一さんを偲ぶ 大村 裕

頒布価格 2,500 円

24 〈小特集〉阿玉台式土器の研究 (1)

特集にあたって 大内千年・建石 徹

研究史 「下総国香取郡阿玉台貝塚探求報告」再読 大内千年

八幡一郎の「阿玉台式土器」について—姥山貝塚報告を中心に— 建石 徹

山内清男の「阿玉台式土器」について 大村 裕

高橋良治の「阿玉台式土器」について 大熊佐智子・下総考古学研究会

関東地方における阿玉台式土器集成結果 (その 1)

埼玉県域における阿玉台式 (後半) の土器 小澤政彦

東京都域における阿玉台式 (後半) の土器 合田恵美子

千葉県松戸市中峠遺跡第 7 次調査の成果

千葉県松戸市中峠遺跡第 7 次調査報告 下総考古学研究会

中峠遺跡第 7 次調査出土の動物遺体 植月 学

中峠遺跡第 7 次調査の石器について 大工原 豊

中峠遺跡第 7 次調査出土黒曜石資料の産地分析

菅頭明日香・建石 徹・大工原 豊・二宮修治

高橋良治氏と下総考古学研究会—在野考古学研究者の軌跡— 大村 裕

中峠遺跡第 6 次調査地点 1 号住居址に隣接する「ピット」出土の土器群について

大村 裕・大内千年・大熊佐智子・小澤政彦・合田恵美子・建石 徹・千葉 毅

頒布価格 2,500 円

発行 下総考古学研究会 (千葉県佐倉市臼井台 213-19)

購入希望の方は下記宛お申し込みください。送料は当方負担。

〒285-0866 千葉県佐倉市臼井台 213-19 (大村 裕方) (郵便振替 00150-6-104810) 下総考古学研究会